

「心を注ぎ出して」

サムエル記上 第1章9節～20節
ルカによる福音書 第11章9節～13節

説教 村上修平牧師

今日は祈りについて考えたいと思います。何をどう祈ればよいか分からないから祈りは苦手だ、と言う方がおられるかもしれません。私も時々無意識に立派なことを言わなければと思ひ、緊張することがあります。こうなると祈りは楽しみというより苦痛に感じられ、祈れなくなってしまう。今日サムエル記上1章をお読みしました。紀元前11世紀頃に活躍した預言者サムエルの母ハンナの話です。祈りの人と言われるハンナの祈りから、私たちがどう祈ったらよいかを学びたいと思います。祈りを身につけるよい方法は人の祈りを真似ることだからです。

ハンナは深い悲しみを持っていました。こどもがない上に、夫のもう一人の妻にはこどもがあり、こどもがないハンナをいじめていたのです。ある時、家族揃ってシロの町の神殿に礼拝に出かけ、そこで食事をしていました。家族団欒の楽しい時ははずですが、ハンナの心は沈んでいました。彼女は席を離れて、神殿の入り口で激しく泣きながら祈りました。「万軍の主よ、まことに、はしための悩みをかえりみ、わたしを覚え、はしためを忘れずに、はしために男の子を賜わりますなら、わたしはその子を一生のあいだ主にささげ、かみそりをその頭にあてません」(サムエル記上1章11節)。ハンナは心の底から神に祈りました。その時、祭司エリに声を掛けられたので彼女は「ただ主の前に心を注ぎ出していたのです」(15節)と答えました。『心を注ぎ出す』とは普通は器に水を注ぐ時に使う言葉です。彼女の心の思いが次から次へと溢れ出す様子が思い浮かびます。

ある牧師のこどもの頃の話です。キャッチボールで父親の投げたボールが顔面にあたり痛くて泣きそうになった時、『泣くな、我慢しろ』と叱られ、必死に涙をこらえた体験があるそうです。我々の社会には人前で泣いたり弱音を吐いたりしてはいけないという風潮があります。そうすると、神様に激しく泣きすぎるハンナの姿はとても弱々しいものに思われます。しかし、本当にそうでしょうか。彼女は祈った後、帰りたくない家族のいる場所へ戻った、しかもその顔は「もはや悲しげではなくなった」とあります。神様の前に心を注ぎ出した後は元気を取り戻したのです。ここには神様を心から信頼する強さがあります。これは、やせ我慢の強さ、大きな負荷がかかるとボキッと折れてしまう強さとは違う、しなやかな、本当の強さです。

私は20代の頃、人にも神様にも本当の自分を打ち明けることができず、いつもどこか暗い表情をしていました。しかしある時、友達にありのままの自分を話す機会に恵まれました。話していると涙がこぼれ、自分は平気だと強がっていたけれど心の中ではこんなに激しく泣いていたのだという事に気がつき驚きました。そして話し終えた時、不思議なことに心の霧が晴れ、清々しい気持ちになりました。友達が私を本当に大事に思ってくれていることが分かったので、固く閉じていた心の蓋があつた時、開いたのです。

さて、ハンナが祭司エリに言った「主の前に」(15節)という言葉は原文では『主の顔の前に』という意味です。では、神様はどのような顔をされているのでしょうか。ハンナが発見した神様の顔は『泣いてもよい、私の前でいい子になろうとするな、たとえお前がどんなことを言っても、私はお前を大事に思っている』というような表情だったのではないのでしょうか。だから恨みも苦しみも満たされない思いもすべて神様の前に注ぎ出すことができたのだと思います。そして以前とは違う晴々とした顔で自分の生活の場に戻る事ができたのです。ここから私達が学ぶのは、いい子のふりをせずありのままを神様に注ぎ出す、それが祈りだということです。

ハンナの祈りは応えられ男の子を授かりました。「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(ルカによる福音書11章9節)、この御言葉は神様の確かな約束です。しかし、求めても与えられないものがある、と知っている方もおられるでしょう。その時は、『神様、なぜですか。もし本当にあなたが生きておられ私を大切と思って下さるなら、私の祈りに応えて下さい』と率直に祈ったらよいと思います。しかし、それでも与えられないとすれば、神様はさらによいものを与えようとされているのだと考えます。どんな親でもこどもにはよい贈り物をするとなれば、なおさら天の父は求める者に聖霊をくださるでしょう。聖霊とは神様ご自身です。神様が私達に注ぎ出して下さる愛を受け止め、そして、安心して神様に心を注ぎ出し、本当の意味で強くされたいと思います。

(記 説教要約奉仕者)